家庭での文化接触度と児童の学習自律性の関係

○松村大希¹・上淵 寿²

(¹東京学芸大学教育学研究科・²東京学芸大学)

キーワード: 自己決定理論, 自律性支援, 文化的階層

The relation between cultural stratum and child's learning autonomy

Taiki MATSUMURA¹, Hisashi UEBUCHI²

(¹Graduate School of education, Tokyo gakugei Univ., ²Tokyo gakugei Univ.)

Key Words: self-determination theory, autonomy support, cultural stratum

目 的

学習動機づけを捉える中心的な理論に, 自己決定理論 (Deci & Ryan, 1985)がある。この理論は外発的な動機づけが自律的な動機づけとなっていく過程を示しており, 社会的価値観などの内在化によって自律的に行動するようになると考え, 自律性の程度によって動機づけを外的調整, 取り入れの調整, 同一化的調整, 統合的調整, 内的調整の5つに分類している。また, 価値の内在化を促進する要因として自律性支援的態度 (Skinner & Belmont, 1993)が考えられている。

こうした理論を踏まえた上で, 小学生を対象に親子関係と学習自律性の関連を研究した竹村・小林(2008)では, 経済的支援・文化的活動・生活習慣の形成と学習自律性の間に関係が確認された。これらは社会学において社会階層の下位要素として考えられているが, 研究の中で指摘されていない。

社会階層 (social stratum)とは, 社会的資源 (財力, 勢力, 評価, 知力, 関係)の保有量の差異と密接に関わる社会的地位において, これらの地位を等しくする人々のカテゴリー(森岡, 2010)で, 主に社会学領域において扱われている。教育社会学領域では, 社会階層の下位要素である母親の学歴や家庭の文化的階層などと, 学習動機づけを測定する質問項目の間に関係があることが示されている(荻谷, 2001; 荻谷・志水, 2004)。

これらの先行研究において, 竹村ら(2008)では社会階層という視点による考察の不足, 社会学領域の研究では学習動機づけの測定方法に改善点があると言える。また, 自己決定理論では養育者の自律性支援的態度によって学習自律性が高まるとされており, そのような親子関係を媒介して社会階層と学習動機づけの間に関係が確認されている可能性がある。

そこで本研究では, 家庭の文化的階層と児童の学習動機づけの間に, 親が持つ学業への価値観と, 親による自律性支援の影響を仮定し, それらの関係を検討することを目的とした。

方 法

調査対象: 東京都公立小学校4, 5年生の児童93名 (男子45名, 女子47名, 性別不明1名)

調査時期: 2014年12月

質問紙構成:

- ① 学習自律性: 藤森・大賀・奥野(1998)
- ② 親の自律性支援的態度: 桜井(2003)等を参考に独自作成

③ 親が持つ学業への価値観: 松岡ら(2000)を一部改編

④ 家庭での文化接触度: 荻谷ら(2004)を一部改編

結 果

得点間の相関係数を算出すると Table 1 に示した結果が得られた。文化接触度得点を相対的な高・低群に分けたところ, 高群の同一化的調整・親の自律性支援的態度・親が持つ学業への価値観得点が, 低群よりも有意に高かった (同一化的調整: $t(82)=2.38, p<.05$, 自律性支援: $t(83)=3.38, p<.01$, 学業への価値観: $t(70.5)=3.19, p<.01$)。

Table 1 得点間の相関係数

	文化接触度	自律性支援	内的	同一化的	取り入れの
文化接触度			.228*	.308*	.181
自律性支援	.457**		.156	.356**	.353**
学業への価値観	.335**	.468**	.232*	.478**	.249*

** $p<.01$, * $p<.05$

これらの結果から, 家庭の文化的階層と児童の学習自律性, 親の自律性支援的態度, 親が持つ学業への価値観の間に関係があることが明らかになった。

考 察

同一化的調整の得点が文化接触度の高群において高いという結果が得られたことから, 文化的階層上位の家庭は学業の重要さの認識を促進させるような環境であると考えられる。そのため, 親が持つ学業への価値観と, 親による自律性支援を媒介して児童の学習自律性に影響しているという仮説は一部支持されたと言える。

今後, 社会階層を構成する他の要素との関連を検討すること, より高次の統計学的手法を用いた分析を用いることで新たな知見が得られる可能性があると考えられる。

引用文献

- Deci, E.L. & Ryan, R.M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- 荻谷剛彦・志水宏吉 編 (2004). *学力の社会学* 岩波書店
- 竹村明子・小林 稔 (2008). 小学生における親子関係と学習への動機づけの相関分析 琉球大学教育学部紀要, **73**, 215-224.